

比謝川を、かつてのような清流の川に蘇生させる活動

比謝川をそ生させる会 会長 中根 章

比謝川(ひじゃがわ)とは

数々の琉歌にもうたわれた比謝川は、沖縄本島中部を流れる。この地域は在沖米軍基地のカデナ飛行場と弾薬庫がドカンと居座っているところでもある。

河口から国道330号線のコザ十字路附近までの17.6kmは、2級河川に指定され沖縄県の管理である。更に源流にあるこどもの国ダム(旧越来ダム)までの約2kmは普通河川で沖縄市管理である。流域面積も実に49.7km²と本島内で最大の河川であり(ちなみに県内最大は西表島の浦内川である)カデナ基地のフェンスに沿うように東支那海にそそいでいる(流域図参照)。



写真1 米軍基地沿いの比謝川(2001年9月)

戦前の比謝川にはヨナバル川、大工廻川、カフンチャ川、ハンザー川などの支流及び数知れぬ池や湧水があった。この豊かで清らかな流域は、人々の生活の源としての生活用水、灌漑用水及び魚貝類の採取などと住民と深く結びついていた。特に中部地域での有数な稲作地帯を形成していた。とりわけ、白川地域は1959年までは水田として耕作されていたのである。

しかし、翌60年米軍に接収されていた上流域の字倉敷に瑞慶山ダムが建設されるに及んで、灌漑としての使用を米軍は一切禁止し、水田は荒れる

がままになった。

50年の朝鮮戦争は米軍基地の強化、拡大をもたらすとともに、基地労働と関連事業をもとめてこの地域の人口は急増していく。いわゆる人口の集中と都市化現象をもたらし、水田の荒廃と水質汚濁等を比謝川にもたらしていくのである。

そ生させる会の発足

72年5月15日、沖縄の施政権が米軍から日本に返還された。いわゆる「本土復帰」である。

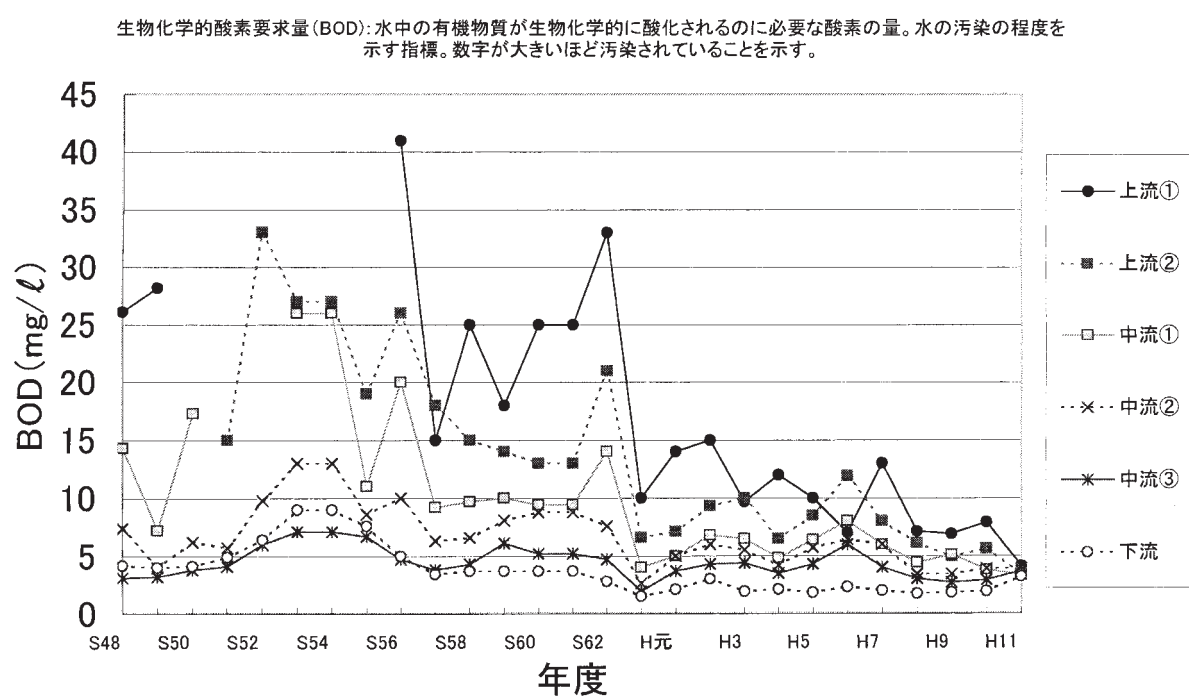
しかし、比謝川沿いの米空軍のカデナ基地と弾薬庫は相も変わらずであった。空からの爆音と地上の事件・事故の発生に苦悶しながらも、徐々に生活のゆとりを享受できるようになってきた。そして、私はふと足元をみつめてみた。そこは比謝川であった。米軍基地からの汚水だけではなく、私たちの生活排水にも汚れ疲弊し切った“川”がそこにはあった。

この比謝川を何とか元のきれいで、清らかな流れに取り戻し、川を知らずに川を忘れ去ってしまい兼ない子ども達に“かの川を与える必要がある”と「比謝川をそ生させる会」が発足した。

ときに、74年12月。私たちの夢は、次の世代に川という自然で自由に戯れる子どもたちを見、そして育てることである。この会員は、議員、団体職員、教師、水道企業局関係者、労組など川と何らかの関わりと興味のある人々が市民として参加しスタートした。その数50人。

河川踏査と水質検査

さてさて、どのような運動をしていけば、比謝川は清流に戻るのか。見当がつかないままに、ときには琉球民謡を聞き、泡盛をチビリチビリやりながら話し合いがつづいた。この頃、国内各地での河川や湖沼等の水質汚染の情報がマスコミ等で報



比謝川を、かつてのような清流の川に蘇生させる活動

比謝川をそ生させる会 会長 中根 章

道されていた。大阪の大淀川の汚濁源が企業であると告発されてもいた。

比謝川沿いの90%は流域住民である。ここからの生活排水が汚染源であるのだから、住民への意識啓発が進めば浄化されるはずだ。一朝一夕で出来るものではないが、データーを示すことが一歩でも二歩でも進むはずとの思いで、私たちは河川踏査と水質検査を重点的活動に据えることにした。

踏査して私たちが見たものは、この流域はゴミ捨て場であるということであった。生活残物、家庭廃品から家畜の死骸まであらゆる物が投棄されていた。そこに川があるから不用物は水に流してしまえという方便そのままが通用しているがごとくであった。最も度胆を抜かれたのは自家用車までが投げ捨てられていたことである。

更に、家庭からの排水は、ABSを主成分とする合成洗剤を大量に含んで側溝を通じて河川に流れ込み、落差のある流域ではものすごい泡立ちとなり空中に粉雪のごとく舞っている光景にりつ然としたのである。川の流れる音が「助けて下さいと」叫んでいるように聞こえた。

長期戦を覚悟した会は、春、夏、秋、冬の年4回の定期河川踏査と水質検査を行うことにした。時には、不法投棄現場近くの人たちに嚴重注意をし又、耐え忍んで告発もした。その結果、不法投棄

はいまではほとんどなくなっている。そして、下水道の普及と加入を市民に推めること。そのことで、生活排水の全てが下水道に流れていけば比謝川の清流は取り戻すことができる。ここで、行政と一体となる運動に結びついていった。

定例の流域調査にやがて、動植物調査も実施し周辺の環境へと私たちの目も拡がり、「川と水と環境」運動へと発展していった。

浄化装置の取り付け

会発足10年目、私たちは当時水の浄化装置として開発されていた「レイクリフター」(間欠式空気揚水筒装置)を源流のこどもの国ダムに設置することにした。実は、この2年程前に同ダムにホテイアオイが猛繁殖し、水槽汚濁と悪臭が充満したことがあった。その時、会員がボランティアで参加でホテイアオイを除去した経緯があった。

レイクリフター経費捻出のためのチャリティーコンサートを実施。沖縄の人々が唄い続けてきた民謡から普久原メロディーまで、それはこの地が産み、自然が育んできた文化であった。このコンサートは後々、恒例の「毛遊びーコンサート」へとつながることになる。

レイクリフターを取りつけたところ、それまで冬場に度々起こっていた現象が消えた。それはこの

黒い夕やけ

作詞・ピセ カツ
作曲・普久原恒勇
編曲・照屋 林賢
唄・伊波智恵子

一、人間にふるさとがあるように
魚たちにも思い出が
あるでしょうか！

街を流れる あの川にこの川に
明日を告げる

ふるさとの魚たちよ
帰っておいで

二、人間にふるさとがあるように
小鳥たちにも
おや 父母の愛があるでしょうか！

夏の山にも あの空にあの雲に
明日を告げる

黒い夕やけが……
ふるさとの小鳥たちよ
帰っておいで

※鳥よ、魚よ
あの森よ、あの川よ
黒い黒い黒い夕やけが……
ふるさとのやさしさよ
帰っておいで

(演奏時間三分五四秒)

比謝川の流れ

作詞・門口 太郎
唄・金城 実

一、タンメンメイが言やびたる
火とう水とー いちやんだむん
昔い言葉 習わしや
此の世なたれー うち変てい

二、昔せー天水 茶わかち
川ぬ水や タイグンかい
ハンドウガーミン 満ちとーてい
あんしかんしし 暮らちよーたる

三、アメリカ世ぬ 世界報 から
日本世なてい ゆく世界報
たむぬめーさん 水汲まん
水道水に プロパンガス

(中 略)

九、真白き花や あいびらん
洗剤公害 泡あぶかー
此りどう世間御万人ぬ
水道水ぬ 元でーびる

十、我つたー沖繩 くぬ島ぬ
命ぬ泉ぬ 水でーむん
天罰ビヤイぬ 来ん内居てい
比謝川見ち 物知やびら



ダムでのセラピアの大量死がなくなったのである。この事実を私たちの地道な活動の実績として内心、自負したりもした。

隣接する米軍基地から廃液等が比謝川に流れ込むことも度々起きている。83年には軍用機を洗った廃液がたれ流された。会としては直ちにカデナ基地から比謝川にそそぐ八ヶ所の排水溝でサンプリングした。その調査結果をもとに那覇防衛施設局、米軍それぞれに要請、抗議。基地内という日米地位協定に阻まれた厚い壁はいまもあるが、清らかな川を取り戻すためには忍耐強く改善を求めつづけていくことにしている。

比謝川清掃デー

会員の取り組みは、地元新聞、テレビ等でも取り

上げられ、結成15周年の89年にはテレビキャスター、野鳥の会会長、農学博士などをまじえた「水と自然を語る歌とロマンのシンポジウム」を開催し環境問題全般にわたる討論を行った。

また一方では、地域婦人会での研修、合成洗剤追放の取り組み、下水道週間での行政とのタイアップなどをつづけた。その結果、沖縄市市民推進協議会主催による「比謝川清掃デー」が年一回行われるまでになった。

住民の川と汚濁に対する意識は確実に高まって来ている。

住民への啓発の一つとして会ではキャンペーンソングを82年に発表（別掲の「黒い夕やけ」と「比謝川の流れ」）。自然と文化にこだわりつづけるのもこの会の特徴である。何故なら、豊かな自然は心地良い文化を育むという思いがあるからだ。それは沖縄戦で地上を焼かれ、住民の4人に1人は戦死という悲惨な歴史的事実を背負って来ているからだとも言えるかもしれない。

これらの思いは子どもたちとの「田植え体験学習」「野鳥観察会」「メダカ・フナ養殖」など自然に対する認識を高める活動を誘発している。そして小学校による比謝川のワーキング調査授業へと結実してきている。

比謝川を、かつてのような清流の川に蘇生させる活動

比謝川をそ生させる会 会長 中根 章

つりを楽しめる川へ

会発足から27年余。はじめての水質サンプリングでBOD(生物化学的酸素要求量)は40～60PPMを示し専門家の話を聞き驚いたものであった。それが、昨年6月、同一場所では9PPM。汚れは確実に改善され、河川敷も自然工法による親水護岸に整備されつつある。また、親水広場、石橋等を備えた1haの水辺プラザへと変わろうとしている。

しかし一方で、台風時等の流域での氾らんという事故が起きており、比謝川を見つめ、自然を回復する私たちの活動はまだつづく。

いつかは、子どもたちと連れだって川のほとりで、ゆっくりと釣り糸をたれる姿を夢見ながらー。

(本賞受賞が、「雨水利用を進める全国市民の会」の日本水大賞と同時であることに特段の思いがある。というのは同会の会員でもあった沖縄市水道局職員のIさんが雨水利用を県内でも広く呼びかけ実践してくれた。また私たちの会にも積極的協力を惜しまなかった彼が他界。先日、遺稿、追悼集が出版されたばかりである。このめぐり合わせに望外の喜びを感じている。)